

水蛭(血吸いビル)の使用法

G. KI. Pharm. Ztg. Nr 39, 1906 の文献紹介(広橋)

薬学雑誌 296 号 1155 頁(1906)より

2004 年 6 月米国 FDA が生きたヒルを認可した。販売が認められたのは、フランスの Ricarimpex 社が 150 年にわたって品種改良してきたというもの。瀉血療法としてヒルの利用はエジプト、中国以来 2000 年以上の歴史を持ち、19 世紀欧州でも盛んに用いられたが 20 世紀前半に急速にすたれた。

100 年前の薬学雑誌には、実用記事として何編か紹介されている。「近来医術に水蛭を使用すること稀なりといえども薬剤師は今日なお其の使用法を指示すべき場合少なからず」。なかなか目的の場所にヒルが付着せず患者に苦痛を感じさせた(精神的に?)ので、新しい使用法を考案した

という。「接着せしむべき身体部分を冷水を以って能く清洗し僅微の白糖末を擦入したる後、別に適當大の空孔を穿ちたる半切れの林檎に水蛭を投し、之を林檎と共に体部に接着するときは水蛭は酸性のリンゴを嫌忌するが故に直ちに体部に固着すべし」

薬誌 274 号 1020 頁(1904)、290 号 368 頁(1906)には、飼育、貯蔵法がある。「器中より水蛭を取り出す際は手指を清潔にし、病虫すなわち掌上に阿列布實(オリーブ実?)形を為さざるものは棄却すべし」「温度の激変を避くべし。水蛭は温よりも寧ろ寒に堪ゆ」

ヒルといえば抗凝血物質ヒルジン。精製はずっと後の 1955 年以降。絶食、空腹にした 5 kg の吸血ヒル(ホラーですね)をすりつぶすという操作に始まり数十 mg とれた。76 年に今と同じ 65 アミノ酸の配列があるが、preliminary data とあるくらい構造決定は難航した。 小林 力